

開催地名：大阪府門真市	
開催日時	令和2年2月26日（水） 14：00～15：30
開催場所	門真市保健福祉センター
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	門真市職員 約50名
開催経緯	災害時及び災害発生以前における、庁内連携・協働と、避難所担当職員をはじめとする危機管理部局以外の職員の防災・危機管理意識の醸成、避難所となる学校現場（校長等）との協働についての知見を得るために、自治体職員として東日本大震災を経験した語り部のお話を伺うこととする。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>三陸沖、深さ24キロメートルを震源とするマグニチュード9.0の地震による津波が、岩手県釜石市を襲った。私は震災当時、釜石市の防災課長を務めていた。釜石市全体で888名の死者、152名が未だ行方不明となっている。震災前年のチリ地震の際に、大津波警報が発令（3メートルの津波）されたが、結局津波は到達しなかったことから、この震災でも「どうせ津波は来ないだろう」という過信により、このような被害を招いたものだと考えている。</p> <p>この大震災の前から、マグニチュード8.5規模の宮城県沖地震が、かなりの確率で近い将来に発生すると言われており、あわせて6メートル程度の津波も襲来するという情報もあった。釜石市でも、自主防災組織を立ち上げるとともに、防波堤を建設して備えていたが、東日本大震災による地震と津波の前には、全く機能しなかった。実際のところは、事前の備えもほとんどしていない状況で、市民の中でも「世界一の防波堤があるから大丈夫」という過信も手伝ってか、避難が遅れて犠牲になってしまったケースもあった。結局のところ、全てにおいて名ばかりの自主防災組織ということだったと言える。システム化されたものが全くなかった結果が、このような大惨事を招いてしまった。</p> <p>（2）震災当日の状況</p> <p>私は、「強い揺れのあとには必ず津波が来るから、とにかく逃げろと呼びかけろ」と防災無線経由で何度も指示を出した。しかし、前述のように、市民の多くは逃げなかった。あまりの津波の威力に世界一の防波堤も決壊して、町にあるものすべてが流されて、綺麗な海岸も無残な姿になってしまった。地震直後に役所内に設置した災害対策本部は、津波で壊滅状態になったため、別の場所へ移し、自家発電にて照明をつけ、緊急会議を行った。避難所も全く同じ状況で寒々しかった。</p> <p>自主防災計画や地域防災計画を立てても、実際には何の役にも立たなかった。</p>

これは計画になかったことが次々として出てきてしまったことによる。例えば、800体も遺体が出て、それを運んで収容・安置し、火葬まで行なうことになったのだが、誰もこのような状況を想定していなかったため、非常に苦勞した。他にも、救援物資が来るのは良いが、それを効率よく、公平に分配するのに想像以上の勞力が必要になるなど、想定外の問題が山積した。災害時には想定外のことが起きることを覚悟する必要がある。

(3) 最後に

災害時に最優先されるべきは、あくまでも人命であるということである。帰宅困難者の対策や避難所の運営方法等についても、より良い方策を求めて検討していくことが必要であるが、まずは自分の命、家族の命、周りの人たちの命の確保を念頭に考えていただきたいと思う。

また、自治体にとって「防災」とは、「万全な備えに向けての事前の取り組み」に尽きると思う。私たち釜石市は、事前の取り組みが甘かった。防災への危機意識に基づいた事前準備の不足、災害に強いインフラの整備、避難誘導體制の構築、実態に沿った訓練や筋書きのない訓練等々、取り組みが不足していた。取り組みの充実のためには、行政だけでなく、住民の意識を変えていくことが必要である。率先して避難をしないと命を助けることはできないので、そういう取り組みを徹底させていくことが必要だと痛感している。平時にしっかりとした防災教育を行い、他市町村や消防、民間企業等との広域での連携や、災害弱者対応への取り組み等を、しっかり行っていただきたいと切に思う。そして、災害で受けた被害を単なる「経験」ととどめることなく、「歴史」として語りついでいくことが、後世の住民の財産となると思う。



開催地より

東日本大震災時に釜石市の職員として、被災直後の対応、また、市の災害対策本部を総括する立場にあり、すべての領域にわたっての運営を担った語り部のお話は、参考になるものばかりであった。